

## Translations and Notes on "Chang sheng dian (長生殿)" (1)

竹村, 則行  
九州大学文学部 : 教授 : 中国文学

<https://doi.org/10.15017/9657>

---

出版情報 : 中国文学論集. 26, pp.108-122, 1997-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :



# 『長生殿』訳注(一)

竹村則行

## 凡例

- 一 『長生殿』本文の底本には、現在最も流布している徐朔方氏の校注本を用いたが、厳密な校訂を施した呉梅校本（『彙刻伝劇』所収）を始め、次の二項に掲げる諸書も随時参照した。
- 二 訳注に当って、出典の確認や本文の解釈等において、以下の諸書を参照したが、訳注の際には、これを一々明示していない。
- 三 塩谷温『国訳長生殿』（『国訳漢文大成』所収、一九二三年）  
徐朔方『長生殿』校注（人民文学出版社、一九五八年）  
曾永義『中国古典戲劇選注』所収『長生殿』（国家出版社、一九七四年）  
蔡運長『長生殿通俗註釈』（雲南人民出版社、一九八七年）
- 三 この訳注では、主に前記参考書に於てなお未注の故事出拠について注出する事にした。全般的総合的な注については、康保成・竹村則行『長生殿箋注』（中州古籍出版社、近刊予定）を参照されたい。
- 四 「唱」の部分の訳出は、時にこの間に挟まれる短い科白や襯字をも含めて、♪♪の記号を用いて示した。また、演員の扮装や動作、及び唱や動作の主体を示すト書きの部分は、原文の体裁を襲って小字で示した。
- 五 訳語のうち、原文の「介」「科」（しぐさ）は、一種の術語として、そのまま「介」「科」として訳出した。

六 訳文は、唱の部分においても荘重な韻文の形式を採らず、意味内容の解釈を重視しつつ、努めて平易な日本文となる様に留意した。それでも訳者の誤解や生硬な訳文を免れなかったかも知れない。読者の忌憚ない御指教をお願いする次第である。

七 本訳注(一)(自序・例言・第一〜三齣)は、一九九五年四月〜十二月に行われた九州大学大学院の演習資料を基にして、担当の竹村が浄書した。この間の演習に参加した助手・院生・研究生は次の通りである。

静永健・岡村真寿美・若杉那子・正木佐枝子・諸田龍美・胡山林  
野田雄史・黄冬柏・呉紅華・角田美和・王辰・蕭燕婉

## 自序

私は白楽天の『長恨歌』や元人(白樸)の『梧桐雨』劇を読むと、何日もやりきれない思いがする。<sup>(1)</sup>南曲の『驚鴻記』も、まだ汚穢から免れていない。これまでも戯曲家は愛情を述べる文を得意としてきたが、近頃は誰もが情詞のやり取りを作品中に描写するようになり、それが余りに度重なって、典則にも乖<sup>(2)</sup>っている。そこで私は、従来楊貴妃故事を取捨選択し、天寶遺事に借りて、この『長生殿』劇を綴った。この劇では、史家の手になる楊貴妃故事の醜聞は、概ね削除した。これは瑕疵を隠匿したのではなく、詩経詩人の忠厚の本旨に求めようとしたのである。しかしながら、歎業極まりて哀情多し<sup>(3)</sup>という様に、後世への戒めの意も実はここにあるのであって、昔から、<sup>(4)</sup>侈る心を逞<sup>(5)</sup>にして欲望を追窮すれば、禍いや失敗を招き、その為<sup>(6)</sup>に後悔しなかつた者はいない。

楊貴妃(玉環)は美貌のあまり国を傾け、ついに生命を落すに至ったが、死後にこの事を悟ったとしても、後悔の念は極まり無かつたであろうか。孔子が『尚書』を刪定した際に「秦誓」を載録したのは、敗れて能く悔悟した穆王を嘉したのであるが、楊貴妃の場合も然りであろうか。ただ、俗曲の終了後に雅楽を演奏するのは困難であるので、私は月の宮殿に借りてこれを補足した。即ち、月の広寒宮で霓裳羽衣曲を聴く時に、玄宗楊貴妃の二人が仙人とし

て上天するようにし、牽牛・織女の二星が仲立ちとなって、二人を切利天に生れ変らせ、二人の情縁を幻虚の境に帰着させるようにしたのである。

折しも清夜に鐘の音が聞こえるが、これもまた夢（迷妄）からはつと覚める心地がする。<sup>(7)</sup>

康熙己未（十八、一六七九）年仲秋、稗畦洪昇、（杭州西湖の）孤嶼草堂に題す。

注

- (1) 原文「輒作數日惡」。…この「惡」には、必ずしも「不満」「嫌惡」の意を含まない。『晋書』卷八十、王羲之伝に用例がある様に、むしろ、感動して「心傷める」「やりきれぬ」方向の意を強く含む。従って、ここに提示された「長恨歌」や「梧桐雨」に対して、洪昇が強く不満や嫌惡感を抱いていたと解するのは、やや早計に過ぎるであろう。むしろ、洪昇はこれらの作品に対して、深い感動を受け、「何日もやりきれない思いがした」と解するべきである。最近では、張哲俊「論《梧桐雨》和《長生殿》」（『文学遺産』一九九七年第二期）もこの問題に言及する。
- (2) 明・呉世美撰。拙稿「校注驚鴻記（二）」（五）」（九州大学文学部『文学研究』九〇～九四、一九九三～九七年）、及び「『驚鴻記』について」（同九五輯、一九九八年予定）参照。
- (3) 原文「樂極哀來」。…『文選』卷四五所収、漢武帝「秋風辭」の李善注に引く『列女伝』に「樂極必哀來」と。
- (4) 原文「垂戒來世」。…陳鴻「長恨歌伝」に「意者不但感其事、亦欲懲尤物、窒亂階、垂于將來者也」と。
- (5) 原文「怨艾」。…『孟子』萬章、上に「太甲悔過、自怨自艾」と。
- (6) 原文「清夜聞鐘」。…明・無名氏『牛郎織女伝』第一回到「古寺鐘聲清夜響、喚醒世間迷途人」とある。これもやはり「遽然頓悟」の意である。
- (7) 原文「遽然夢覺」。…『莊子』齊物論に「昔者莊周夢爲胡蝶、俄然覺、則遽遽然周也」と。

思えば昔、嚴定隅<sup>(1)</sup>（曾藝）君と杭州の阜園<sup>(2)</sup>で座談した際、話が開元天宝間の故事に及び、偶<sup>たま</sup>ま李白の境遇に感じて、『沈香亭』伝奇を作った。ついで北京に遊んだ時、亡友の毛玉斯が「沈香亭の場面は熟知されている」と言ったので、李白の故事を削除し、代りに李泌が肅宗の中興を輔佐した故事を入れて、『舞霓裳』と改名したところ、役者は久しくこの戯曲を練習していた。その後更に思ったのは、玄宗の愛情の深さは歴代帝王の中でも稀有であるのに、馬嵬の変では七夕の誓いに背いて楊貴妃を守り通せなかったし、一方、唐人には楊貴妃が死後に蓬萊仙宮に帰り、明皇（玄宗）が月の宮殿に遊ぶ説話があると。そこでこれらの故事を合せて、専ら金釵鈿盒の情縁を主題にして描写し、『長生殿』と題したところ、諸同人に頗る評判がよかったし、衆人はこの新本を演習する事を願ったので、遂にこの『長生殿』伝奇が世に伝わることになった。蓋し、『長生殿』は十余年の歳月を経て、三たび改稿して始めて成ったものであり、私は「此を楽しんで疲れを知らない<sup>(3)</sup>」程であった。

歴史に書かれた楊貴妃故事には汚穢に塗れたものが多いが、私はこの『長生殿』劇を撰するに当って、ただ白居易『長恨歌』と陳鴻『長恨歌伝』とを抛り所にした。そして中間の潤色した部分は、多く「天宝遺事」「楊妃全伝」から採った。もし故事が汚穢に渉るようであれば、民風教化の妨げになる事を恐れて、絶えて混入させなかった。読者は私の意図を汲んでいただきたい。いま、『長恨歌、伝』を附載して、『長生殿』の由る所を表す。「楊妃本伝、外伝」及び天宝遺事に関する諸書は、刪略するのに不便なので、載録しないことにする。

棠村相国<sup>(4)</sup>（梁清標）は、嘗て私のこの『長生殿』劇は『牡丹亭』の情熱があると称賛した事があったが、世間で至言とされた。私自身は文采は臨川（湯顯祖）には及ばないと思うが、それでも劇曲の韻律は嚴守し、些かの踏み外しも無い様にした。というのも、杭州の徐靈昭氏<sup>(5)</sup>は今日の周瑜たる人物であって、『九宮新譜』の論著があるのだが、私は彼と共に韻律を審定し、一字として注意しなかった文字は無かったからである。

以前に『鬪高唐』『孝節坊』の劇を作った際には、皆友人の呉舒堯<sup>(6)</sup>が私のために批点を入れてくれた。今、『長

生殿」が世に行われると、役者はこの劇が長つたらしくて演じ難いのを嫌い、竟に粗野な連中によって妄りに改編され、関目（筋立て）も全て廃されてしまった。呉君はこの事に憤慨し、馮夢龍の『墨憨齋定本传奇十四種』に做つて、『長生殿』二十八折をあらためて設定し、そして魏国夫人と梅妃の故事は別立ての二小劇としたが、これは的確で正当な処置であつた。また全篇に亘つて呉君の論評を得たが、これは私の意図の深奥を啓発してくれる事が甚だ多かつた。呉君の改定本は二日の上演なので特に速くすむ。簡便の爲には、呉本を求めて練習すべきであつて、粗野な俗本によって誤つてはならない。

この『長生殿』劇は、雅正を崇び、真情を描くことをめざした。最近の演出家の改編にはどうしても従えないものがある。例えば、魏国夫人が玄宗の寵愛を受けたり、楊貴妃が梅妃と諍まがう場面などは、卑しい田舎女の醜態をなしており、含蓄に乏しく、觀るに耐えない。また「哭像」折は、「哭」と題するように葬礼の凶事であつて、祝祭ではない。しかし当今の上演で満場みな紅衣を着用するのは、心情と事実が食い違つており、明皇の楊貴妃への深い愛情が描き出せないばかりか、宮女の哭泣とも全くそぐわない。「舞盤」や末折「重圓」の演舞に至つては、原名を霓裳羽衣というのだから、ただ白い上着に紅い裳を用いるのが本来のスタイルであつて、曲中の演舞の節節によつて、一二の小道具を使えばよい。今日、楊貴妃の「舞盤」に浣紗舞をまねたり、末折「重圓」の仙女の舞に、ライトやハンカチを持つて舞つたりするのは、みな依り所がなく、まったく取る所が無い。

洪昇防思、はじめて識す

注

- (1) 敝定隅：敝曾樂、字は定隅。『餘杭県志』卷二十七に伝がある。
- (2) 阜園：敝定隅の父敝沆が築いた庭園の名。杭州城東にある。
- (3) 原文「樂此不疲」。：『後漢書』卷二下、光武帝紀に「帝曰、我自樂此、不爲疲也」と。
- (4) 棠村相国：梁清標、字は棠村。真定人。明清期の人。清に入り、戸部尚書、保和殿大学士を歴任した。『清史列伝』

卷七十九に伝がある。洪昇『稗畦集』に「上真定梁相公」詩がある。

(5) 徐靈昭：徐麟、字は靈昭。長洲人。伝記不詳。洪昇『稗畦集』に「贈徐靈昭」「秋夜靜德寺同徐靈昭」詩がある。『長生殿』の徐靈昭序には「長洲同学弟徐麟靈昭題」と署する。

(6) 吳子舒鳧：名は儀一、字は珠符、号は山。錢塘人。『国朝杭郡詩輯』卷二、『杭州府志』卷九十四に伝がある。洪昇『嘯月樓集』『稗畦集』『稗畦統集』等に交友詩を収める。

## 長生殿伝奇

### 第一齣 伝概

【南呂引子】【滿江紅】（末が登場）♪古今の情愛において、一体誰が真実の愛を貫き通したであろうか。ただ二人に不變の至誠さえ有れば、終には連理の枝のように添い遂げることができるのである。至誠が有れば、南北万里に別れていても二人に何の愁いもないし、生と死さえも二人には論ずるに足りない。笑止にも、世間の男女が情縁に疎いことを嘆いているのは、彼ら自身に真の愛情が無いからである。至誠は金石を感動させ、天地をも揺り動かし、太陽の如く輝き、歴史に名を残す。臣下や子弟の忠孝の念も、全てが至情に由って成ったのである。曾て孔子は、『詩経』編纂に当って、鄭・衛の民歌を至情を含むとして削除しなかった。吾輩がここに、玄宗楊貴妃の故事を宮・徴の音律に載せ、太真外伝に借りて、新しい戯曲に作るのは、まさしくこの二人の至情を描くためである。↓

【中呂慢詞】【沁園春】♪天宝の明皇（玄宗）と楊玉環貴妃とは、正に宿縁というべきものである。楊貴妃は華清宮に入浴を賜り、初めて天子の恩寵を承けて以来、長生殿の七夕乞巧においては、天子と永遠の愛を誓った。そして霓裳羽衣の新曲が成り、その歌舞が終わらぬうちに、范陽から安祿山の攻め太鼓の音が激しく起こった。やがて蒙塵

『長生殿』訳注（一）（竹村）

の途次、馬嵬駅において、天子を警護する六軍が出発しようとして、あわれ艶麗の美人（楊貴妃）は生命を落した<sup>(4)</sup>。蜀の西川へ巡幸した明皇は哀傷に堪えなかつたが、遙かな天上と人間にその姿を尋ねるべくもない<sup>(5)</sup>。幸いにその靈魂は生前の罪を悔い、已に仙籍を得て天宮に帰り住んでいた<sup>(6)</sup>ので、都へ還御した玄宗が楊貴妃墓を改葬しようとしたところ、そこには貴妃の形見の香囊が残っているだけであつた。二人の永劫不滅の愛情は、天孫たる織女がこれを証明し、道士の楊通幽がこれを伝えて、かの金釵と鈿盒とを再び將來した<sup>(7)</sup>。こうして、二人は最後に月の宮殿で再会し、霓裳羽衣の遺事が広く文壇に伝わることになつたのである。√

唐明皇（玄宗）は霓裳羽衣の宴席に飲樂を尽くし、

楊貴妃は漁陽の変（安祿山の乱）に生命を落す。

鴻都客（楊通幽）が玄宗を導いて、月の広寒宮で二人は再会し、

織女星が二人の長生殿の永遠の愛の誓いを証明する。

注

(1) 原文「華清賜浴、初承恩澤」。…第二齣「定情」、第四齣「春睡」に述べられる。

(2) 原文「長生乞巧、永訂盟香」。…第二十二齣「密誓」に述べられる。

(3) 原文「妙舞新成、清了未了、鞞鼓喧闐起范陽」。…第十一齣「聞樂」、第十二齣「製譜」、第十六齣「舞盤」、第二十三齣「陷関」、第二十四齣「驚變」に述べられる。

(4) 原文「馬嵬駅、六軍不発、断送紅粧」。…第二十五齣「埋玉」に述べられる。

(5) 原文「西川巡幸堪傷、奈地下人間兩渺茫」。…第二十七齣「冥追」、第二十九齣「聞鈴」、第三十二齣「哭像」、第四十一齣「見月」、第四十五齣「雨夢」に述べられる。

(6) 原文「幸遊魂悔罪、已登仙籍、回鑿改葬、只剩香囊」。…第三十齣「情悔」、第三十七齣「尸解」、第四十三齣「改葬」



に述べられる。

- (7) 原文「証合天孫」。…第三十三齣「神訴」、第四十齣「仙憶」、第四十四齣「愆合」、第四十七齣「補恨」に述べられる。  
(8) 原文「情伝羽客」。…第四十六齣「覺魂」に述べられる。  
(9) 原文「鈿盒金釵重寄將」。…第四十八齣「寄情」、第四十九齣「得信」に述べられる。  
(10) 原文「月宮会」。…第五十齣「重円」に述べられる。

## 第二齣 定情

【大石引子】【東風第一枝】（生が唐明皇に扮し、二人の内侍を連れて登場）♪盛世に冠を正し、衣裳を垂らして南面すれば、天下山河はたちまち皇唐に統一される。天上の雨露は春をもたらし、深宮の草木が一斉に芳ひらく。泰平を讃える昇平曲が演奏される中、春景色もすばらしく、まことに行楽に絶好である。願わくは、このまま楊貴妃と共に溫柔の郷（愛欲の世界）に生を終えたいもの、白雲たなびく隠者の仙郷など羨ましくもない。♪

「宮殿に春が訪れ、宮中の樹々は春色を帯びる。天の喜びは時の安定に合い、民は和合して万事が順調である。この時に、宮中では夏の九歌曲を歌って政務の要諦を頌揚し、周の六舞を舞って百官の制服が翻り舞う。特別に陽台の音楽を賞玩し、前夜からの雲雨が漂い飛ぶ。朕は大唐大宝の皇帝である。東宮から身を起し、天下を治める事になった。朝廷では右に出る者のない姚崇や宋璟に政務を委ね、宮中では張説や韓休の諫言によく耳を傾けて聴き入れた。また幸いに辺境も万里に亘って静穏であり、民間の穀物も三銭の安さである。まことに天下泰平なることは太宗の貞観の治にも似通い、刑罰を行わない風潮は漢の文帝の治世にも劣らない程である。近頃、朕は政務の余暇に、音楽や美人にも心を寄せる様になった。昨日宮女の楊玉環を見たが、性格が温和で、容姿端麗であるので、吉日を選んで貴妃に冊立しようと思う。既に命を伝えて、華清池に入浴を賜い、永新や念奴に命じて貴妃の更衣に侍従させる様にした。そして高力士に命じて引見させる様にしたので、間も

なく来るであらう。

【玉楼春】（丑が高力士に扮し、二人の宮女が扇子を持ち、且が扮する楊貴妃を連れて登場）♪ 恩愛が天より降るのを心から嬉しく思い、入浴後のお化粧も成って、儀仗の中を宮廷に赴く。（宮女）後宮の宮女はまだ楊貴妃を見ないうちに一斉に愁いが生じ、宮殿の階段に並び立って、儼かにその姿を見ようとする。♪

（至る介。丑が進み出て生に謁見し、跪く介）私め高力士がお目通りします。貴妃に冊立された楊氏は既に宮門に着き、お召しを待っています。（生）連れて参れ。（丑が出る介）天子様の仰せである。楊貴妃様を上殿させるように。

（且が進み出て拜する介）私め貴妃の楊玉環がお目通り致します。吾が皇帝にはいつまでもお健やかであります様。（内侍）お楽に。（且）私めは卑賤の出身でありながら、幸いに宮女に選び充てられました。にわか私に御寵愛が加えられる事を聞きましたが、失態を招いて天子の尊厳を損なうことを恐れます。（生）貴妃は代々の名家の出であり、才色兼ね備わっているので、宮中の職に充てることに朕は深く満足する。（且）有り難く存じます。（丑）お楽に。（且が起つ介。生）酒宴を用意致せ。（丑が伝える介）（内で音楽を奏する。且が生に酒をつぎ、宮女が且に酒をつぐ。生は正坐し、且は傍に坐する介）

【大石 過曲】【念奴嬌序】（生）♪ 朕は万里の天下に遍く美女を探し求めて来たが、誰も並の宮女以上の者はいなかった。ところが日麗かな今日、天が与え賜うたは、実に絶世の美女である。思うに、彼女こそ宮殿の寵愛を独占して、玉冊に冊封されるべき美女であり、三千人の宮女も彼女には甘んじるであらう。（合）願わくは、貴妃への天恩が満ち足りて、貴妃への寵愛が永遠に続きますことを。♪

【前腔】【換頭】（且）♪ お褒めにあずかり忝なく思います。しばし考えてみました、私如き下賤の者が後宮の激務に堪えないことを恐れます。しかし、私めは天子の寵恩を受ける事になり、この身は瞬間に俗界から天上へと遷ることになりました。宮女となったからには、あの自ら熊の突進を防いだ馮嬖<sup>2</sup>や、天子との同輩を辞退した班姬<sup>2</sup>の例にならない、永く紅筆を持して天子様にお仕えしたく存じます。（合）願わくは、貴妃への天恩が満ち足りて、貴妃への寵愛が永遠に続きますことを。♪

【前腔】【換頭】（宮女）♪ 全く楽しいことです。お尋ねしますが、この宮中では、一体誰が一番の美しさでしょう。

あの昭陽宮の趙飛燕にも似た貴妃様こそ、天子のご寵愛を一身に受けるにふさわしいお方です。貴妃様、どうぞ遠慮なさらずに、黄金の御殿に装いを凝らし、玉楼に歌声が響く中、千年万年のご寵愛を祝って美しい觴を捧げまじょう。(合)願わくは、天恩が満ち足りて、貴妃への寵愛が永遠に続きますことを。↓

【前腔】【換頭】(内侍)♪仰ぎ見れば、天子様は太陽を繞る龍をあしらった天衣を召され、雲が移るが如く雉尾の宮扇がサツと開かれると、天子様はお化粧したての貴妃様を前にして御満悦の様子。やがて宴席となって頻りに酒が進められ、宮殿中に春風が吹き、芳香が漂う。素晴らしいことに満月が出て黄金の月光が揺らぎ漂い、夕霞が綾絹となって五色の雲がたなびく処、やがて黄昏時を迎える。(合)願わくは、貴妃への天恩が満ち足りて、貴妃への寵愛が永遠に続きますことを。↓

(丑)月が上りました。陛下、宴もこれまでに致したく存じます。(生)朕は貴妃と共に庭を散歩し、しばらく月を玩めでよう。(裏で音楽を奏する。生が旦を連れて前に進んで立ち、その他の者は後ろに退き、並んで立つ介)

【中呂】【古輪台】(生)♪御殿を下り、月光に灯籠をかざしてよく見れば、咲き誇る庭の花も楊貴妃の嬌あでやかさには及ばない。そっと傍らによれば、貴妃の黒髪や衣裳が何とも麗しく照り映える。(そっと笑い、旦に向う介)今宵の歓楽や風月のすばらしさは、あの高唐の雲雨の夢にも勝るほどだ。(旦)宴遊につき従い、幸いにも今日から君王のお側に侍らせていただきます。玉の階段にそっと立ち、天子のお言葉にうっとりし、儀仗にも芳香が漂い、衣裳は夜露にしっかりと。顧みれば、九重の宮殿の薨の上に鴛鴦が仲良く身を寄せあって眠3っています。↓

(生)明りを持って。西宮に参ろうぞ。(昔の者が応ずる介。内侍と宮女がそれぞれ明りを持ち、生と旦を導いて行く介)(合唱)

【前腔】【換頭】♪銀燭がきらきらと輝き、影は千々に揺れる。顧みれば、玉の簾が斜めに開き、銀河が白く輝いている。高架道や廻廊にも到るところ香塵が漂う。夜景の何とすばらしいこと。仙人掌の時計の上には一對の鸞鳳の夫婦(玄宗と楊貴妃)。「瓊花玉樹」や「春江夜月」の歌が斉唱されるうち、はや月光も宮牆をよぎる頃合い。薄絹の帳をかかげ、やおら酔いに誘われ、貴妃を抱いて新婚の蘭房に入る。↓

(丑)天子様に申し上げます。西宮に着きました。(生)内侍は下がり居れ。(丑)春風が吹いて寝殿の扉が開き、

(内侍) 妙なる天の音楽が玉楼に鳴り響く。(共退場)<sup>(4)</sup>

【余文】(生) ♪花燭がゆらゆら揺ぎ、月光が窓辺に映える中、今宵の飲びを語り尽くす。(合唱) 他の宮女が住む別院や離宮では、長い時間が経つことも構わず。↓

(宮女が生と旦の衣服を着替えさせ、そっと退場する。生と旦が坐する介。生) 銀燭の光が薄絹に綺羅びやかに照り映えるとき、

(旦) 芳香漂う寝殿の奥深く、ありがたく天恩を承け奉る。(生) 他の宮女が控える後宮では、今夜はさぞかし眉を蹙めていることだろう。(合唱) 明日には、楊貴妃様を歌った「得宝歌」が争って宮中で歌われるであります。 (生) 朕と貴妃との偕老の契りは、今夜この時から始まる。(袖から金釵と鈿盒を取り出す介) ここに金釵と鈿盒とがある。これを卿に贈って、結婚の愛の誓いとしよう。

【越調近詞】【綿搭架】(生) ♪この金釵と鈿盒は、百宝や珍花を集めてできており、朕はそれを懐中深く秘めて、殊更大切にしてきた。今夜、この金釵をそなたの雲鬢の助けとし、双鸞の金釵をそなたの髪に斜めに挿すことにしよう。この鈿盒は、そなたがいつも袖中にしまい、ハンカチに包み込んでおく様に。どうか金釵の双鸞の様に二人がいつも並び飛び、扇状の鈿盒の様に二人が堅く同心の結びに結ばれたいものだ。↓ (旦にわたす介。旦が金釵・鈿盒を受け取り、謝する介)

【前腔】【換頭】♪金釵鈿盒を賜り、天子の飲びにお仕えできる事を感謝します。ただ私ごとき卑しいものが、天子の雨露の御恩を一身に承け得ないのではないかと恐れます。(横を向いて見る介) こっそり見れば、金釵の鳳凰は天高く飛び、鈿盒の龍は地に盤踞している。この双股の金釵と上下合わさった鈿盒とは本当にすばらしい。願わくは、二人の愛情がこの黄金の様に堅く変らず、金釵も鈿盒も分離せずに、いつまでも完全でありたいものだ。<sup>(5)</sup> ↓

(生) 春夜の朧月が花の枝を照らす頃、

(旦) 今宵こそ天子の御恩愛をお承けする時。

(生) 長く愛しい人に寄り添えば、心もうっとりとしてくる。

(合唱) 年年歳歳、この時にこそ歡樂を尽くすべきもの。

元 種

白 居 易

雍 陶

趙 彦 昭

- (1) 原文「粟賤三錢」。…『資治通鑑』卷二二二、開元十三年條に「是歲、東都斗米十五錢、青齊五錢、粟三錢」と。
- (2) 原文「馮嬭当熊、班姬辞輦」。…『蒙求』標題に「馮媛当熊、班女辞輦」とあり、同じく蒙学書の『龍文鞭影』も同様である。馮嬭は漢元帝の宮女。身を挺して熊に体当たりして元帝を救った。班姬は漢成帝の妃。成帝との同輦を固辞して、帝を諭した。いずれも『漢書』卷九十七下外戚伝に見える。
- (3) 原文「重重金殿宿鴛鴦」。…唐・孟棻『本事詩』に引く李白「宮中行樂詞」に「玉樓巢翡翠、金殿宿鴛鴦」と。「金殿宿鴛鴦」、清・王琦注『李太白文集』本は「珠殿鎖鴛鴦」に作る。
- (4) 原文：(丑)「春風開紫殿」、(内侍)「天楽下珠楼」。…李白「宮中行樂詞」八首其六の句である。
- (5) 原文「惟願取情似堅金、釵不單分盒永完」。…白居易「長恨歌」に「釵留一股盒一扇、釵擘黃金合分鈿。但令心似金鈿堅、天上人間會相見」と。

## 第三齣 賄権

【正宮引子】【破陣子】(浄が安禄山に扮し、射服・氈帽のいでたちで登場)♪俺は戦に敗れて出世が頓挫したのに失望し、更に罪に問われて心が傷む。しかし、俺の野望は十分に漲り、勇猛心が盛んに湧いて止めどが無い。ここは仮に忍耐するのみ。♪

「俺の垂れた腹は膝先まで鏡り出し、千鈞を持ち上げる力がある。また智謀に長け、胆力も絶倫である。悪龍たるこの俺がどうして一時の屈伏に甘んじよう。やがて天下を翻弄して人々を驚かすであろう」。俺は安禄山、営州柳城の人である。母は阿史徳、軋犖山中に子を授かることを祈り、家に帰って俺を生んだので、禄(＝犖)

『長生殿』訳注(一)(竹村)

山と名付けた。生まれる時、テントに光が満ち、鳥獸が鳴き騒いだ。後に母が安延偃と再婚したので、安姓を名のった。俺は節度使張守珪の幕下に入ったが、彼は俺に異相があると言ひ、俺を義子として討撃使を授け、奚契丹討伐に行かせた。その時、俺は勇を恃たんで輕拳妄進し、大敗を喫して逃げ歸つた。幸いに張節度使の恩情によつて殺されずに濟み、京都に送られて聖断を仰ぐことになった。昨日京都に着いたが、吉凶はまだ分らない。幸いに俺の義兄弟に張千という者がいて、もと楊丞相府の役人である。俺は昨日護送の役人を買収して、飯積放されたので、張千に話をつけて、その役人に礼品を受け取つてもらつた。すると、先方から今日彼の所で待つ様に言われたので、今から行くとしよう。(行く介) ああ、この安祿山とて男の中の男なのに、まさかこれで終りにはなるまいが、思えば忌々しいものよ。

【正宮】 【錦纏道】 龍蛇の様に猛々しいこの俺様、もともと河を逆流させ、海をも裂く程の勢いだったが、反つて甕の中の鼈オウゴンとなり、たちまち豪傑を苦しめる囚人籠を恨む事となつた。敗軍の将には死刑が待っているのが分つていれば、むしろ戦場で潔く死して捕縛を免れた方がよかつた。私は突然に失脚したが、夜に金を投ずる様にして偷かに賄賂を贈り、この身を落とし穴から救い出そうとする。これは天が私をまだ生かそうとするのであり、どうして私が中途で空しく挫けることがあるう。↓

ここはもう丞相府の門だ。張の奴が出て来るのを待とう。(丑が張千に扮して登場) 「君王の妃の兄弟たる楊丞相は三公の位を占め、その丞相の使用人たる俺様も七品の位。」(會う介) 安兄貴、ようこそ。楊丞相はもう兄貴の贈品を全て受け取り、兄貴を屋敷にお連れする様にとの事です。(浄が揖する介) 兄弟の周旋に感謝するぜ。  
 (丑) 丞相はまだいらつしやらないので、しばらく詰め所で待ちましょう。「全ては天下を調理する内閣の宰相の手によつてこそ、(浄) 辺境の敗軍の將を救うことができる。」(共に退場)

【仙呂引子】 【鵲橋仙】 (副浄が楊国忠に扮し、従者を連れて登場) 帝都に榮華を誇り、天恩は外戚にまで及び、我が兄妹全てが恩寵を受ける。中書令たる私は政權を独占し、手をかざせば火傷をする程に威風赫赫たるものがある。↓

「国政は全て我が掌中に歸し、私は三台や八座の高官を極める。日暮れに退朝して私邸に歸ると、無數の官僚どもが私の風下に拜する」。私は楊国忠、西宮の楊貴妃の兄である。右相の官にあり、司空の秩を食む。日月

(天子と貴妃)の恩光を分ち仰ぎ、風雷にもひとしい威令を発するものである。(冷笑する介)私は贅沢を極め、欲  
楽を尽さないものは無い。賄賂によつて権力を買い、天をも引き戻す勢いである。左右の者、下り居れ。(従  
者は応じて退場)(副浄)今し方、張千の申すには、辺境の將の安禄山という者が、敗戦の為に京都に送られて裁  
かれるところ、特に当方に贈り物を致し、死罪を免れる処置を求めている由である。思うに勝敗は兵家の常の  
事、戦陣に偶ま敗れたといつても情状酌量すべきであらう。(笑う介)彼の死罪を免じてやるのも、朝廷の人材  
を惜しむ為である。既に彼を連れて来る様に命じたので、その上で処理を決めよう。(丑がひそかに登場して会う介)  
張千が申し上げます。安禄山が外で待つております。(副浄)連れて参れ。(丑)承知しました。(退場するそぶり、  
青衣・小帽の浄を連れて登場する。丑)こちらへ来い。(浄が膝行して会う介)罪人安禄山めが楊丞相殿にお目にかかりま  
す。(副浄)起て。(浄)罪人は死罪にあたる囚人なので、跪いて申し上げるのが当然です。(副浄)お前の来意  
は張千から聞いている。まず罪を犯した事情を詳しく申し述べよ。(浄)丞相殿、お聞き下さい。罪人めは軍  
令を遵守して奚契丹の討伐に参りました。(副浄)起つて申せ。(浄が起つ介)  
【仙呂  
過曲】【解三醒】♪私は勇猛を恃んで出撃し、向うところ敵はありませんでした。ところが不意に蕃兵の夜襲を  
受けて白兵戦となり、弓矢も尽きました。↓(副浄)その後、どうやって脱出したのか？(浄)その時、罪人め  
は必死に血路を開いて包囲を脱出しようとし、♪幸いに鎗一つ馬一匹で免れることができました。自分のささや  
かな功績に免じて罪を減じて下さる事を望んでいましたが、今日重刑に処せられようとは思いませんでした。  
(頭を地に打ちつける介)どうか閣下のお力によつて、枉げてお慈悲を賜りたく存じます。↓

【前腔】【換頭】(副浄が起つ介)♪法を犯して軍を失うのは国家の大法に関わること、私は朝政を総括するとはいつ  
ても、どうして勝手に専断できよう。まして刑罰は既に確定しているので変更は難しく、事態の好転は望めないで  
あらう。↓(浄が跪いて哭する介)楊丞相のお救いがあれば、罪人めは生き延びられます。(副浄が笑う介)♪私の発言  
や計画が少しばかり有力だからといって、この間の機関かつかんはなかなか口では言えないものだ。↓(浄が頭を地に打ちつ  
ける介)全ては丞相様が頼りです。(副浄)やむを得ん。明日私が出仕した折、機を見てやってみよう。♪うまく  
行けば、卿のいましめも解かれ、卿の生命も保てるかも知れんぞ。↓

(浄が頭を地に打ちつける介) 楊丞相殿の大恩を蒙ることができ、罪人めは犬馬の如く御恩に報いたく思います。では失礼します。(副浄) 張千、彼を連れてゆけ。(丑が応じ、浄と共に出てゆく介) 「勝利の旗を目前にし、耳に朗報を聞く」。(共に退場) (副浄が思案する介) 思うに、安祿山は辺境の小将であり、大した功績も無い。今や敗戦で死罪を犯したのに、私が特に彼奴を救えば、必ず陛下の疑いを招くであろう。(笑う介) おお、そうだ。先日の張節度使の上奏文の中に、彼が六カ国語に通じ、諸般の武芸に秀でているので、辺境の武將の任が適當だとあった。私は早速兵部に意を通じ、これを口実にして陛下に奏上し、安祿山を陛下の御前で試験していただく。そこで、機に乗じて御裁可をいただければ良策ではないか。

楊丞相は権力を専らにして、もともと意気豪放、  
彼の手にかかると万事が瞬時に変化する。 盧照鄰

ただ黄金を積んで刑罰を免れるだけ、 李咸用

これでは自薦でも三公になれるというもの。 杜荀鶴

注…無し(康・竹村『長生殿箋注』参照)。